

【令和四年度人権に関する作品】

小学生三年生以下の部 最優秀賞

みんなが生きやすい社会

えびの市立加久藤小学校 三年 西添 文音
にしぞえ ふみね

私は、小学二年生の時に母から「じのままじの長さまでのばしてヘアドネーションしてみる？」と言われてかみをのばし始めました。夏休みにヘアドネーションの活動をしているジャーダックというところに約四十センチかみを送りました。

みなさんは、ヘアドネーションという言葉を知っていますか。ヘアドネーションとは、脱毛症や小児がんのちりょうなどでかみを失った子どもたちに、寄付されたかみの毛で作ったウィッグを提供する活動のことです。

初めは、ヘアドネーションは、かみを寄付することで喜ばれることだとは思っていませんでした。しかし、「髪がつなぐ物語」という本を読んで、かみがない子のことをからかったり、ジロジロ見て「かわいそう」と言ったり、いじめたりすることがあることを知りました。私も、小学一・二年生の時、何もうるいことをしていないのに体のことでいやなことを言われたり、仲間はずれにされるいじめを受けていました。その頃は、「なんで私ばかりいじわるされるの?」と悲しくてたまりませんでした。そのため、かみのことで悲しい思いをしている人たちの気持ちが少し分かるような気がして、差別やいじめがなくなっしてほしいと思いました。

「人権とは、人が生まれた時から持っている自由と平等、生存などの権利。」と辞書に書いてありました。日本国憲法第十一条には、基本的人権というのがあって、第十二条には、「一人一人が大切にされて、幸せや自由を求める権利がある。」と書かれています。また、第十四条に、すべて国民は平等で差別されることがあってはいけないことが記されています。

私は、人と違うというだけで区別したり、「いじわる」をするような社会ではいけないと思いました。「髪がつなぐ物語」の著者、「別冊芳子」ベックシヨウコさんが、あとがきに「ウィッグを着けていようがまいが、ありのままの姿を受けいれてくれる家族、友人、社会でなくては心の傷は治らない。時に、その心の傷は人生をくるわせ、命さえもうばいかねない」と書かれています。

私は、人を大切にできる社会になるためにこの作文を書いて、少しでも多くの人に知ってもらいたいです。そして、差別やいじめを受けている人が生きやすい社会になることを願っています。これからも、ヘアドネーションを続けて、困っている人や悲しんでいる人がいたら、自分ができることは何か考えて行動したいと思います。

ヘルプマーク

宮崎市立大淀小学校 三年 高倉 一のは
たかくら

わたしは目が悪いので、三ヶ月に一度びょういんへけんやに行きます。けんさが終わると、パパがびょういんのカフェで、こぼろびにケーキをこちそうしてくれます。シジにならんでいる時、自分の前にいた人のリュックに、プルスとハートのマークの赤いふだがぶら下がっていました。わたしはそれをふしぎに思ったので、家に帰ってママに聞いてみました。すると、「それはヘルプマークだよ。」と教えてもらいました。

ヘルプマークとは、外見では分からないしょうがいやなんびょうなどがある人たちが、えん助やはいりよをひつよしとしてしている事をまわりにつたえる物なのだそうです。それは元々、東京都で作られたマークでしたが、今では日本全体でのふきゅうがすすんでいっているそうです。ママが言いました。

「あなたはめがねをかけているから、目が悪いって事がほかの人にも分かるよね。でもね、目に見えない所にしょうがいがある人もたくさんいるんだよ。ただ、多くの人がその事に気づかないだけ。」

その言葉を聞いて、あのヘルプマークは「気づいて下さい。こまった時には助けて下さい。」というサインなのだと、わたしは理かいすることができました。色々調べてみて分かった事ですが、このマークがたん生して今年で十年目だそうです。しかし、ヘルプマークの事を知らない人がまだたくさんいるようです。

そこでわたしは、自分では何ができるのかを考えてみました。まず、公きょうのり物ではせきをゆるめる。こまっているような人を見かけたら、ゆう気を出して声をかけてみる。たくさん考えたのに、今のわたしにできそうな事は、たった二つしかありませんでした。はっきり言って、自分がかっかりしました。その時、ママが声をかけてくれました。

「たった二つだけど、あなただけじゃなく、ほかの人たちが同じ事をやれば、助かる人もふえるんじゃないの。」

なるほど。と思いました。そして、そのためには、ヘルプマークの事もたくさんの人たちに知ってもらわなければならぬと思いました。

わたしは、このマークをつけている人を見つけたら、できるだけ思いやりのある行動をとろうと心がけたいです。

人種と人権

門川町立門川小学校 三年 黒木 恋華くろき れんげ

私の家では夕食の時に、ニュース番組を見るのが習坎んです。夏休みが始まってすぐのことでした。

「アメリカのテーマパークで人気キャラが黒人少女二人をむし。ハイタッチにあじず」

このニュースのえいぞうで、白人の親子にはタッチやハグをしていたのに、黒人の子どもたちには、手と首を横にふって通りすぎてタッチしてあげませんでした。

それを見て私は、さべつだと思いました。しかし、なぜそんなさべつをするのかは分からなかったので、お母さんに、

「どうしてこの着ぐるみの人は、この子たちにタッチしてあげんかったっちゃろうか。」

と聞いてみました。お母さんは、

「世界には、たくさんの国があつて、色んな人種の人がおるとよね。はだの色や体けいがちがつたりしてる。昔は、黒人の人たちをどれいとして働かせたりしていたれきしがあるのよ。そういう昔の感かくが今ものこつてる人たちが、こういう行動をしてしまうのね。日本人だつて海外に行つたら、さべつされることもあるのがげん実にあるのよ。」

と書いていました。

正直、お母さんの話はなんとなくしか分かりません。私はこのニュースを見て、さべつといじめは、同じだと思いました。はだの色や目の色がちがつらつという理由で、なか間外れにしたり、ぼう力をふるつたりすることが、今でも色いろな国や地いきであるぞうです。

学校の中だつて、色いろな人がいます。私は国語がすぎで漢字のべん強もすぎです。でも算数は少しにが手です。スポーツがとく意な人もいればにが手な人もいます。音楽がすぎな人、絵が上手な人、色いろです。クラスの中だけで考えても色いろな人がいるので、世界にはたくさんの国があるのだから、もっと色いろな人がいるんだらうなと思います。

このニュースのように、人種さべつをしている人はまだまだ世界中にたくさんいます。ようですが、人それぞれちがつぶんがあつて当たり前ということを、世界中の人たちに分かつてほしいなと思います。人種さべつをされるのはなぜかといつとじろから、もっとくわしくそのれきしをべん強しなきやいけないのだらうなとも思いました。人それぞれのこせいやその人の国のとくちよう、文化で、全ぜん考えがちがつことを、もっとべん強していききたいなと思つています。

世界には、色いろな人種の人がいて、人それぞれこせいがあること、同じ人間で、それぞれに人権があることをわすれないように、せい長していきたいと思つています。

大人になつたら、色いろな国に行つて、色いろな人種のお友だちを作りたいなと思つています。学校でもたくさんの友だちや先生、一人一人が、こせいや人権があることをわすれず、大事にしていきたいです。

あたりまえとは

宮崎市立穂小学校 一年 迫間 大誠

ぼくはよく、「あたりまえ」といってぼをしかう。ある日おかあさんに、「あたりまえじゃん」と言っていると、「なにがあたりまえなん」と言われた。ぼくは「たえられなくて、するとおかあさんが、「あたりまえといいつとぼをかるがるしくつかいなさんな」と言った。

ぼくは考えた。おかあさんが「あたりまえ」といってぼをしかう時、ぼくが「あたりまえ」といってぼをしかう時はいつかの方がちがうと気づいた。ぼくは、「とげんさん、そうでしょ。」といつみでつかうことが多いが、おかあさんは、「いはんがたぐらぬいとはあたりまえじゃなら」と言ったり、「元気ですいせることもあたりまえなとじゃなら」といふ風にしかっている。かんしゃにつながるつかい方をしているのだ。

ぼくはまた考えた。ぼくがぶだんの生活であたりまえになつていふことが、どれくらいあるだろうと。そして、ぼくは生活をしている中でほとんどのことを、あたりまえに思っていることに気づいたのだ。ぼくがあたりまえに思っていることは、ありがとつにつながることはからだ。たとえば、ぼくが元気な体で家族がいて学校にも行けていること。家に住めて、服も着られていはんをたべてお風呂に入れていること。あたりまえはかんしゃすることなんだ。そして、かんしゃすることがあたりまえなんだ。ぼくがぶんきょうをするのはあたりまえのこと。自分のためだから。だけど、学校に行つてぶんきょうができていふことをあたりまえに思つてはいけない。いはんがたべられることもあたりまえではない。たべられない人も世の中にはたくさんいる。まっすしい国の人やたべものが不足していたり、びょう気でたべることができない人もいるのだ。ぼくはかせをひいたらびょういんにいっれて行つてもらえぬけど、よぼつやちりょうがうけられなくて命をおとしている人もたくさんいる。

ぼくが生活しているかんきょうは、とてもめぐまれている。元気な体で歩いたら走つたりできることも、家族や友だちと話をして笑つたりできていることもけつしてあたりまえと思つたらいけないのだ。ぼくがお手つだいをするのはあたりまえ。だれどおかあさんは、「してあたりまえ」とは言わない。必ず、「ありがとう」や「助かったよ」と言つてくれる。ぼくは、「ありがとう」と言つてもらえぬといつとええもあたりまえになつていたのかもしれない。

今世界では、せんそうをしている国もある。ぼくたちの国ではせんそうはおきていないが、み近にせまつている地球温だん化や新型「コロナウイルス」も、ぼくたち人間に対してなにかしらのサインではないかと思つ。ぼくたちは、日々あたりまえになつていふことを、あたりまえに思つてはいけない。むさいなとつでもあたりまえにかんしゃの気もちをもつ意味の大切さや、日々を思いかえしてたくさんの方のあたりまえに氣づいて、かんしゃの心をわすれずにつまむのだ。